

学級内における対抗文化としての「オタク文化」

牧 野 宏 紀*

Otaku Culture as Counterculture in the Class

Hiroki MAKINO

要 旨

本研究では学級内の生徒間序列化現象として近年注目される「スクールカースト」の議論をサブカルチャー研究に応用し、そこにおいて従来は下位たる存在と見なされてきた「オタク」たちの文化が、むしろ「スクールカースト」秩序に対する対抗文化として働きうることを示した。ただし「オタク文化」は「スクールカースト」的秩序と結びついたサブカルチャー・スタイルの序列化に変化を与えることはできても「オタク」グループ内での同調圧力に対して対抗し得ず、そのため「コミュニケーション能力至上主義」に対する対抗性を持ちえないことも明らかとなった。

なお、本研究は高等学校卒業者を対象として2012年3月から10月にかけて実施した半構造化インタビュー調査の結果に基づいている。

キーワード：スクールカースト オタク文化 サブカルチャー 対抗文化

I. 序 論

本稿¹⁾の目的は、主として中学校や高等学校の生徒間に生じる序列化現象に注目し、生徒間の秩序形成にサブカルチャーがどのようにかかわっているのかということ、インタビュー調査によって得られた語りから解明することにある。日本における高等学校進学率は1974年に初めて90%を超えた後は一貫して90%以上で推移しており、2015年には96.6%に達している（文部科学省2016：46-49）。すなわち、現代日本における若者のほとんどは、小学校に入学してからの12年間を「同一年齢の子供がひとつの学級にまとめられ、易しいものから難しいものへと並ぶ同一のカリキュラムに従って進級する」（西澤・渋谷2008：160）学校システムに組み込まれて過ごしてきているのである。それゆえ、学校でどのような社会的経験をしてきたのかということは、特に若者にとってきわめて重要であると考えられる。明石要一によると、その学校空間では、学級内における生徒同士のインフォーマルな相互作用が、時として明示化されたカリキュラム以上に生徒の意識や人格形成にとって重要な役割を果している（明石1986）。一方で、近年、このような生徒同士のインフォーマルな集団形成にまつわる生徒間の序列化現象が「スクールカースト」²⁾として注

平成29年9月1日受理 *社会学研究科社会学専攻修士課程 修了生

目されつつある。「スクールカースト」研究の先鞭をつけた森口朗は、概ね生徒各個人の「コミュニケーション能力」によって左右される序列関係として「スクールカースト」を描いていたが（森口2007）、「スクールカースト」形成の要因を「コミュニケーション能力」に還元する視点は、鈴木翔（鈴木2012）によって批判されている。鈴木は「スクールカースト」を、学級外の様々な若者文化間の関係を反映した、生徒グループ間の勢力関係として捉え直しており、これに従えば「スクールカースト」研究にはサブカルチャー・スタイルという視点が欠かせないということになる。実際に「スクールカースト」を扱った言説においては、しばしば特定のサブカルチャー・スタイルが序列の下位に位置付けられるものとして登場する。それこそが本稿で扱う「オタク文化」である³⁾。

しかし、それらの言説は「スクールカースト」において「オタク文化」が下位に貶められることを自明視しており、「オタク文化」の持つ対抗文化としての側面を見てこなかった点で問題を含んでいる。『ハマータウンの野郎ども』においてP.ウィリスが論じたように、ある場において貶められているサブカルチャー・スタイルは、一方では対抗文化として機能しうる（ウィリス1985：3-15）。同様に、「オタク文化」が「スクールカースト」秩序において周縁的地位にあるからこそ、その実践者は「スクールカースト」上位を目指す競争から降りて、自分たちが主役になれる別の秩序に身をゆだねることができるとも考えられる。そのようなオルタナティブな秩序は、「オタク」たちが、一元的・絶対的なハイアラーキーとして学級成員の価値観を支配する「スクールカースト」秩序を主観的に相対化することを可能にするだろう。そこで、以下の章では筆者が行ったインタビュー調査の結果から、そのような「オタク文化」の対抗性について検証する。

Ⅱ. 「オタク文化」実践者へのインタビュー調査

1. インタビュー調査の概要

今回の調査では「スクールカースト」秩序内における「オタク」のサブカルチャー経験を問題にする目的から、半構造化インタビューを採用した。調査にあたっては表に示すように14名の対象者にそれぞれ40分から2時間程度のインタビューを実施し、許可を得て内容をICレコーダーに録音した。対象者のサンプリングは機縁法によって行われた。そのため対象者は調査以前から筆者と交流のあった人物であるか、その人物を介して紹介された人物である。対象者はそれぞれ1998年から2003年の間に中学校に入学し、2004年から2009年の間に高等学校を卒業している。そのため、本稿で述べる事柄は全て1998年から2009年までの12年間の状況に基づいたものである。なお、調査期間は2012年3月から同年10月にかけてである。また、紙幅の都合から、全ての対象者の語りを本稿で取り上げることはしない。

調査にあたっては対象となる「オタク」を定義する必要があるが、その作業には特有の困難が伴う。その困難は「オタク」というカテゴリーが「学生」や「教員」といった言葉と異なり、何らかの組織の成員を指す言葉ではなく、あるいは「高齢者」や「障害者」、「男性」と「女性」のように制度化された明確な境界を伴うカテゴリーでもない点に起因する。さらに「オタク」という用語がそもそも日常語の一つであり、様々な場面で多義性に富んだ曖昧な用いられ方をされて

表1 インタビュー対象者の基本的な情報

対象者	性別	誕生年	中学・高校在籍期間	調査実施時点での職業	出身地
A	男	1988	2001年4月から2007年3月	大学院修士課程	千葉県
B	男	1991	2003年4月から2009年3月	大学生	奈良県
C	女	1986	1999年4月から2005年3月	団体職員	和歌山県
D	男	1986	1998年4月から2004年3月	会社員	滋賀県
E	男	1986	1998年4月から2004年4月	会社員	福井県(中高生時代は滋賀県)
F	男	1988	2000年4月から2006年3月	大学院修士課程	島根県
G	男	1989	2001年4月から2007年3月	会社員	大阪府
H	男	1986	1998年4月から2004年3月	会社員	徳島県
I	男	1991	2003年4月から2009年3月	大学生	奈良県
J	男	1988	2001年4月から2007年3月	無職	大阪府
K	男	1986	1998年4月から2004年3月	アルバイト	大阪府
L	男	1989	2001年4月から2007年3月	無職	大阪府
M	男	1988	2001年4月から2007年4月	会社員	兵庫県
N	女	1988	2001年4月から2007年5月	団体職員	愛知県

きたことも、「オタク」定義の困難さに拍車をかけている。先行研究における「オタク」の定義に関しては、これまでにその独特な相互行為スタイルや精神性による定義（斎藤2010）のほか、作品選好に準拠した定義（森川2003, 2008）が示されている。また、それは「オタク」たち自身の名乗りとして用いられる自己執行カテゴリー⁴⁾であることもあれば、特定のサブカルチャー・スタイルやその実践者を指す言葉としてではなく、ただ単に自分たちと異なる者として排除する対象に付与される他者執行カテゴリーとして用いられる場合もある（上間2002）。そのため何をもち「オタク」と称すのかという問いには、当事者の間ですら答えの一致を見ない。それゆえ本稿では、インタビュー対象者が一様に「深夜アニメ」⁵⁾の視聴を、自らを「オタク」として差異化するためのツールとして活用していたことに着目し、「深夜アニメ」やそれらと密接な関係を持つ文化商品を選好する者を「オタク」として暫定的に定義する。

2. 「オタク」生徒のスクールカースト経験

まず「スクールカースト」秩序の内実と「オタク」生徒の過ごし方の例として、I氏へのインタビューを参照しよう。I氏は「オタク」であったが、I氏の学級では「クルマとかバイクとか…このバイクがどうか、誰かの彼女がどうか」（I氏）といった話題を好む生徒が「スクールカースト」上位層を占めており、一方で「オタク」趣味はスティグマ化されていた。そのためI氏自身、学級内で「オタク」趣味を公にすることは困難だったようである。そのためI氏は学校自体にも魅力を感じず、授業単位を落とさない程度に登校するという学校生活を送っていた。

（I氏）「学校では・・・ほんと一部の人だけですな。そういう、オタクの事を（話すのは）。学校じゃなくて帰り道とかでちょこっと話すぐらいでしたな。いちばん、そういうのに敏感な時期って言うか、ちょっとでもそういう作品みてたら、あっ、あいつオタクやでって言われる。俺はそれがいやだったんで、隠れてやってました。オープンな子はあんまりいなかったな」

「中学、高校ともあんまり行ってなかったんで、昼から登校的な。ネットのほうで全てが回っ

てたんで(笑) ネットの生活の方がメインでしたね。やっぱ学校では、なかなかわかってくれる人もいなかったです。ネットやと好きな人が集まってくるやないですか、だから楽しくて、そっちの方がメインな生活でした。ミクシィもやって、一時期自分でサイトも持ってましたし」

しかしながらインターネット上の交友圏につながることで、I氏はたとえ学級内で周縁的地位におかれていても、サブカルチャーを介した交友を確保することができ、肯定的な趣味生活を送ることができた。I氏は、学級の枠を超えて広がる「オタク文化」の世界にインターネットを介してつながることで、「オタク文化」をスティグマ化し、下位に位置づける「スクールカースト」の秩序に絡めとられることなく自分たちのサブカルチャーを肯定的に受け止めることができていたと言えるだろう⁶⁾。しかし、時に「オタク文化」は実践者個人を「スクールカースト」の一元的支配から解放するのみならず、「スクールカースト」の在り方それ自体に影響を及ぼすこともある。次に考察するのは、そのように本来「スクールカースト」において下位に位置するとされるサブカルチャー・スタイルが「スクールカースト」上位の生徒に普及することで「スクールカースト」の在り方を揺さぶっていくプロセスである。

3. 〈文化の媒介者〉の存在

インタビュー対象者の語りを比較すると、中学、高校時代の経験として、学級の中に「オタク」や「オタク文化」への偏見があり、その中で「オタク」生徒は「オタク」生徒同士で「かたまっていた」という語り⁷⁾と、とくにそのような偏見はなく、「オタク」生徒と「オタクでない」生徒がそれなりの交流をもっていたという語りの二種類が見られた。後者においては学級内に〈文化の媒介者〉と呼ぶべき生徒が存在し、彼らの活動によって「スクールカースト」秩序と「オタク文化」の結びつきに変化がもたらされていたのである。例として以下で取り上げる対象者E氏は、高校生当時にマンガを4000冊以上所有し、その漫画を学校で貸し出すことで交友のネットワークを作っていた。

(E氏)「後はね、当時4000冊ぐらいマンガを読んでたっていうところからなんやけど、マンガを人に貸しまくって、そのネットワークを作って(笑)不良みたいな人って言うとアレやけど、そういう人にもマンガを、授業中にフッって渡すっていう」

その対象は「不良みたいな人」から「スクールカースト」上で下位に位置する「いじめられている人ら」にまで及び、「萌え系」マンガをそれまで知らなかった層へと広める役割を果たしていた。この人物は「オタク文化」を周囲に広めることでクラスの人気者となっていたといえる。こういったいわば〈文化の媒介者〉ともいえる人物の存在はその学級における「スクールカースト」のあり方に影響を与える可能性がある。注目すべきは、学級内に「オタク」に対する偏見がなく「オタク」生徒と非「オタク」生徒との交流が盛んに行われていた事例では、「オタク文化」を積極的に周囲の非「オタク」生徒に広めようとする人物が学級内にいたという点である。もちろん

ん、全ての事例にそれが当てはまるわけではないが、逆の事例、つまり偏見があった学級に〈文化の媒介者〉がいた事例が見られなかったことはきわめて示唆に富む。なぜなら〈文化の媒介者〉がいることによって、そのままでは下位とされるであろう「オタク文化」が「スクールカースト」のなかで上位とされる生徒にも広まり、その結果、趣味のハイアラーキーに変化が生じると考えられるからである。

この変化が起こった結果、「スクールカースト」下位者である「オタク」生徒が、「オタク文化」に関する知識において「スクールカースト」上位者を上回ることになり、上位者と対等の立場に立つことができる。さらにその結果として「スクールカースト」が消滅するか、あるいは再編されると考えられる。

4. 「オタク」グループ内部での序列化

しかしながら、学級全体における「スクールカースト」的ハイアラーキーから仮に逃れることができたとしても、それによってサブカルチャーを巡る序列競争から自由になるわけではない。「スクールカースト」的文化的ハイアラーキーを無効化したはずの「オタク」グループ内部において、それとは別の序列が形成されているのである。以下においては「オタク」グループ内部で個別に働く序列化作用について見ていくことにしよう。以下で見るL氏の場合、学級全体の中では容姿や「モテ」が序列化の基準として重要視されている。L氏の述べるところによると、容姿とサブカルチャー・スタイルのイメージが結びついて「スクールカースト」の底辺に位置づけられるべき「オタク」像が学級成員に共有されている。つまり学級全体ではその人がどのようなサブカルチャーを実践しているのかということにかかわらず、容姿によってカーストが左右される状況があるということである。しかし一方で、「オタク」グループ内部においてはその基準はあまり重要ではない。「オタク」グループ内部では「オタク」系の知識をどれだけ持っているかによって序列化がなされているため、集团成员には知識獲得への圧力が強くかかっているのである。

(L氏)「それはな、当人はどう思ってるかはともかく、見た目でこいつオタクだなんて判断されるのがな、こっちが決めつけちゃってるから、それで、この人オタクだなんてなっちゃうとその時点でその人の地位が下になっちゃう。そういうのはあったかなって、わしは逆に思われる側だったから。見た目もこんな感じだし」

(L氏)「グループの中でも抜群に知ってる人間は上に見られてたよ。かなわんなんて思うことはあったし。どのゲームをやってるとか、ゲームをやってる量によって位が左右されたってのはある。わしはそんなにやってなかったけど、なぜか師匠って呼ばれてたで、全員から。(中略)これは男性特有だと思うけど、そのグループから外されることにとてつもない恐怖心を感じるから、必死についていこうとするんだよ。知らなくても。だから知らないふりして後でこっそり調べたりしたゲームとかザラだしね」

また、次に見るM氏の実例からは「オタク」グループ内での主流文化への同調が、グループ内

での地位にかかわってくるのがうかがえる。M氏はアニメに関して「大まかに言えば、メカものメインですかね。やっぱりキャラありきじゃなくて、世界観があって、それに付随するものとしてキャラがあるという見方をしてるので」というような視点でアニメを見ていたが、高校で入部した「図書部」のメンバーは違っていた。「図書部」とはM氏によると本の評論などを行う部活動でありメンバーは全員がアニメ好きであった。M氏は入学時に知り合った友人の誘いで「図書部」に入部したものの、他の部員に対しては不満を持っていたと述べている。

(M氏)「あの空間が嫌いやったというのは、そいつらの口から出てくるのが『あの娘萌やわ〜』とか『あの娘可愛いわ〜』とかキャラ萌え的な話ばかりやったんですよ。お前ら死んでしまえと本気で思った(笑)(中略)もうお前らと話すことは何もない。そんなことをしていると部活でだんだん孤立していったわけなんです。だからそういう場所に入って知識はすごい深まったけども、最終的にはしのぎの場所に過ぎなかったって感じです。高校という場所をいかにしのぐかっていう」

つまり「図書部」部員における主流の価値観はM氏の価値観とはそぐわないものであり、そのためにM氏は「図書部」の「オタク」グループ内で次第に孤立していくこととなった。なお、注目すべき点として、M氏自身によっても「しのぎの場所」という言葉が用いられているように、たとえ孤立化してもグループから完全に離脱する、つまりこの場合「図書部」から退部するという選択をM氏がとらなかったことである。その要因としては学級、ひいては部活外の学校空間が、M氏の言うところの「ヤンキー」を上位とする「スクールカースト」によって秩序付けられた空間であり、そこにおいてM氏の「居場所」は必ずしも十分には確保されていなかったことがある。

(M氏)「どこの学級もヤンキーが8割占めてたんですね、あとの2割は頭がすこぶる賢いか、良い子ちゃんか、だからヤンキーがすべての主導権握ってましたわ」

そのため、高校生活を「しのぐ」ためには、たとえ周縁におかれていたとしても「図書部」の輪から外に出るわけにはいかなかったのである。同様の「グループから外されることへの恐怖」はL氏も口にするところであり、ここからは、「オタク」グループを形成してその一員になることが、一方で「スクールカースト」秩序を相対化しつつも、他方では趣味に関する知識競争やグループ内の優勢な価値観をめぐる政治に絡め取られていくことを意味しているといえるであろう。

6. ジェンダー的な差異

「スクールカースト」とサブカルチャーの関係を見ると、ジェンダー的な差異を考慮しないわけにはいかない。筆者の調査においては、その対象者が男性に偏っており、女性を対象としたインタビューは2件だけと少ない。その点に留意する必要があるものの、その2件のインタビューからも学級内におけるサブカルチャーと「スクールカースト」をめぐる政治の男女差を見いだせる。以下で見るC女史は自らを「腐女子」⁸⁾と名乗る女性「オタク」であり、中学二年生の「女

の子のグループが二分化される時期」に、同好の仲間たちとともに「ちょっと異彩を放った集団」を形成していた。しかしながら、学級内において彼女らの集団はありのままの趣味活動を行えたわけではない。

(C女史)「女の子のグループが二分化される時期やったんで・・・二年生でめっちゃ荒れてる時期やったから、女の子の中でめっちゃおしゃれで、めっちゃ権力持ってて、男の人ともめっちゃ話すみたいなグループとは、違うみたいな。まあ、私ら・・・怖かったですね、その権力持ってるところのことが。(中略) ちょうど私そこらへんから、中学校2年生あたりから腐女子入ってきたと思うんですよ。やっぱ表立って本見せられないものってあるじゃないですか、腐女子って。それでやっぱりその辺から教室の隅でコソコソと、部室で本見せたりとか、だから向こうから見ててかなり異様な雰囲気やったと思うんですよ、私。なにしてるん?とかめっちゃ言われてたし。だからそう介入してくるから、教室でみんながやってることはちゃんと把握しとかなあかんし、それを必死に守ってた」

このように中心的地位にあり、権力を持っているグループと少しでも友好的なポーズをとっておくことが、学級内の女子生徒社会で安全を確保するためには必要不可欠であったため、C女史は「腐女子」でありつつも「教室でみんながやってることはちゃんと把握しとかなあかんし、それを必死に守ってた」のである。また、以下のように、女子の場合では「スクールカースト」を左右する特徴として、男子とも話せるということが第一にあげられているのが特徴的である。このような、異性からのまなざしが序列の決定要因として第一にあげられる語りは、男性対象者の語りには見られない傾向である。

(C女史)「何せ、可愛くなければいけない、話せなければいけない、男子とも普通に話せなければいけない、それでいてちょっとバカな子のほうがいいとか、ファッションも得意やしアイドルもめっちゃ知ってるっていう子らは・・・なんていうか中心グループにいてて」

また、つぎにN女史のインタビューに注目すると、「オタク」グループ内部での序列化パターンについて、男女での差異がある可能性が見えてくる。

(N女史)「やっぱりその、オタクでも引き出しを持ってると、それだけの人と、たぶん女子に思うの、たぶんそんな中で上下関係があるんじゃないかな。女子だとさ、もうコスプレする人とマンガとフィギュアだけする人って比べると、なんとなくコスプレする人のほうが上だって気がする。マンガ・フィギュア好きな人っていうのは少し地味なイメージがあるから、そういうので上下関係ができるってところがあると私は思うな。(中略) 例えばマンガとかフィギュアばかりやってても、格好とかちゃんと今どきのブランドとか着てたりしたら、その人は上だよ。見た目が大きいかもな。オタクでも合コン行くとって子もいたし、そういう子はちょっと暗い感じのオタクの子をコケにしたり」

N女史が述べることによると、女子のグループ内ではコスプレをする者に比べてマンガを読んだりフィギュアを集めたりするだけの者は低い地位に見られている。その理由は「少し地味なイメージがある」ためである。つまりここにおいては同じ作品が好きであっても、そのことをどういう形で表現するかという「形態」の問題が、単純な知識量の差よりも序列の決定にかかわってくるということである。また、男子の場合は「よく知っている」という、言わば趣味へのコミットメントの差が序列化につながっているのに対し、女子の場合は趣味へのコミットメントそのものよりも、ファッションなどのコモン・カルチャーへの同調や異性関係への積極性が序列化にかかわっていると考えられる。

Ⅳ. 「オタク文化」の対抗性についての再考

これらのインタビュー結果を受けて「スクールカースト」とサブカルチャーの結びつきを再考してみよう。結果として、先行研究で述べられているような「スクールカースト」と結びついたサブカルチャーの序列化現象は確かに見られたとあってよい。また、その中で「オタク」が低位に位置づけられる現象も同様に確認された。ただし、実際に「オタク」である者であっても容姿の良し悪しで学級内の非「オタク」生徒からの眼差しは変わってくる。つまりここで最も重要な地位評価基準となっているのは「容姿の差」であり、実のところ「オタクであること」そのものが「スクールカースト」上での序列決定に寄与する割合は低いというべきであろう。このように、実はサブカルチャー・スタイルそのものへの評価はニュートラルであり、その実践者の容姿やコミュニケーションの積極性によって高くも低くもなりうるということは〈文化の媒介者〉が登場することを可能にする下地となっており、「オタク文化」の対抗文化性ということにもかかわってくる。なお、ここで「ニュートラル」というのは、サブカルチャー・スタイルに対して、いつ何時も、いかなる評価もなされていないという意味ではない。むしろメディアを通じたステレオタイプや、評価を下す最終的な主体である個々人の身近にいる実践者のあり方によって、各サブカルチャー・スタイルには常に何らかの評価が下されているのである。そのため〈文化の媒介者〉がいなかった場合、そのサブカルチャー・スタイルは広まらず、学級の初期段階で低い地位に見られているサブカルチャー・スタイルは低い地位のままとなる。しかし、ひとたび〈文化の媒介者〉が登場すれば、その状況は容易に変化するるのである。

「スクールカースト」上の文化ハイアラーキーはその実践者に対するステレオタイプのな像に基づいて形成されているわけだが、決してそのサブカルチャー・スタイルそのものが単体で評価され、序列づけられているわけではないため、仮にそのステレオタイプに合致しない実践者が現れた場合、彼の交友圏における当該サブカルチャー・スタイルの評価には変化が起こる。その変化をもたらすアクターである、ステレオタイプに合致しない実践者こそが〈文化の媒介者〉となるのである。〈文化の媒介者〉はステレオタイプに合致しない「オタク」像とともに「オタク文化」そのものを学級内に普及させ、その結果、先述したように元々の「オタク」生徒が「オタク文化」に関する知識で「スクールカースト」上位者を上回ることで彼らと対等の立場に立ちうる状況が発生し、「スクールカースト」の消滅や再編へとつながるのである。これを踏まえて言え

ば「オタク文化」は「スクールカースト」秩序に対して二重の対抗性を持っていることになる。第一の対抗性は「オタク文化」が学校の外、すなわち「スクールカースト」秩序の作用する場を超えた外部に広がっていることにより、その実践者に「スクールカースト」を相対化する視点を提供しようという点である。ここでは「オタク文化」やそのコミュニティの存在はもっぱら実践者個々人の自己肯定感の向上という内面的なレベルで働くものとみなされる。しかし、第二の対抗性として〈文化の媒介者〉の存在に見られるように、「オタク文化」の対抗性は時に個人の内面を超え、「スクールカースト」そのものへの直接的な働きかけを行うレベルでも作用するのである。

だが一方でそれとは矛盾するような現象を、「オタク」のコミュニティは含んでいる。「スクールカースト」において低い地位とされがちな者が、その「スクールカースト」による抑圧から逃れるためには、以上で述べたように「スクールカースト」秩序を相対化する趣味のコミュニティに身を置く必要がある。しかしL氏の事例で見られたように、「オタク」グループの一員にいったんなってしまうと、今度はそのグループから排除される可能性が彼にとって大きな懸案事項となるのである。それは「オタク」グループから排除されてしまえば「スクールカースト」秩序の中に帰っていくしかないが、そこで上位に立てる可能性は極めて低く、その場合彼は学級内で孤立無援の状態になってしまうためである。それを避けるためにL氏はグループ内で価値を持つ知識の獲得に必死になり、M氏はたとえグループ内の支配的な価値観が自分の意に沿わないものであっても、それに折り合いをつけてグループに残るほかなかったのである。すなわちここからいえることは、「オタク文化」は「スクールカースト」への対抗文化として働く一方でその実践者を別の競争に絡め取っていくものであり、グループメンバーを「競争」そのものから解放する手段にはなりえないということである。そこでは知識量の差やグループ内の支配的価値観への同調を基準にした、言わば別の「スクールカースト」が成立しやすいと言えるだろう。さらに女性の場合においては、趣味へのコミットメントの差よりも流行のファッションなどへの同調や異性関係への積極性が「オタク」グループ内の序列化に大きく寄与している。流行のファッションへの同調や異性関係への積極性は「スクールカースト」原理から独立したものではなく、「オタク」グループ内においてもこのような学級全体と同様の基準で序列化が行われているとすれば、そもそも女性において「オタク」グループが「スクールカースト」秩序に対する対抗文化として十分に機能しているとは言い難い。

V. まとめと考察

前章で見たように、一見強固に結びついているかに見える「スクールカースト」とサブカルチャー・スタイルの対応関係は〈文化の媒介者〉の登場によって容易に変わり得る。つまり、「オタク文化」を単に「スクールカースト」の下位に位置付けられるサブカルチャー・スタイルとして自明視することはできないのである。特に2010年代に入って以降、「スクールカースト上の『新中間層』としてのライトオタクが台頭」（濱野2012：71）し「アニメやゲームがカジュアル化し、『オタクはキモい』という烙印が消滅したことによって、オタクは幅広いサブカルチャー愛好家

が自称し得る」(熊代2014:80) ような状況が出現したという議論がみられることを踏まえれば、少なくとも「オタク文化」に関しては「スクールカースト」上の地位の変動期に入っていると言えるだろう。

一方で、「スクールカースト」に基づいたサブカルチャー・スタイルの序列が流動化した学級空間においてはコミュニケーション能力の差異だけが取り残されることになる。個々人のコミュニケーション能力には依然として差がある中で文化ハイアラキーがフラットになるということは、学級全体レベルで「サブカルチャー・スタイル」という形式面での審美的要素が取り払われ、「コミュニケーション能力」が一元的な序列化原理と化すことを意味している。そのうえ、コミュニケーションの呪縛からは、「オタク」グループに入ることによってさえも逃れることはできない。なぜなら、これまでも見てきたように「オタク」グループ内部においては、そのグループで主流の価値観への同調圧力が働いているため、場合によっては自分にとって最上の価値観を取り下げてもそれに同調する必要がある、このようなグループ内での折り合いをつけるためには、相応のコミュニケーション能力が要求されるためである。そのための知識の獲得はそれ自体を目的とするのではなく、むしろ獲得した知識をコミュニケーションのツールとして使用するために行われるという意味合いが強い。間庭充幸がその著書『日本の集団の社会学』で述べるところによれば、日本的集団においては集団成員に対して同質的なものの包摂に向けた強い競争が働き、それがエスカレートするにしたがって、皆がある目的に志向すること自体が価値を帯びるようになり、その「ある目的に志向する」という行為そのものへの同調と競争、すなわち同調競争が新たに生まれるという(間庭1990:50)。つまりグループ内においても、そのグループの主流的価値観への同調競争という競争原理があり、競争自体は「オタク」グループに入ることによってもなくならない。そして同調はコミュニケーションの一形態であるため、同調競争は容易にコミュニケーション能力を巡る序列化へと転化しうるのである。

このようなコミュニケーション能力の重要性の増大は学級場面のみならず、広く現代社会全般に見られる現象であるといえる。なぜなら本田由紀が述べているように、現代社会は個々人の情動や対人スキルなどが「能力」として重視される比率が高まっている「ハイパー・メリトクラシー」社会だからである(本田2005)。むしろ学級場面に生じる「スクールカースト」のような序列化は、本田のいう「ハイパー・メリトクラシー」の中高生社会における一つのあらわれとして見るべきだろう。このように「スクールカースト」的序列化基準のうちに占めるコミュニケーション能力の割合が高まるなか、コミュニケーション能力の劣る者を吸収するとみなされてきたのが「オタク」グループであるが、そこにおいてもまた同調競争というコミュニケーションが発生する以上、「オタク」グループ内にもコミュニケーション能力至上主義は蔓延する。そのため、学級内における「オタク文化」とその実践者のグループ化は、その学級で上位とされるサブカルチャー・スタイルへの対抗文化にはなりえても、ますますその重要性を増しつつあるコミュニケーション能力による序列化への対抗文化とはなりえない。そして同調競争が多かれ少なかれあらゆるサブカルチャーのグループに見られるとすれば、「ハイパー・メリトクラシー」の一側面としてのコミュニケーション能力の重要性の増大に対する対抗文化は、今のところ見あたらないと言わざるを得ないのである。

注

- 1) 本稿は筆者が2013年1月に奈良大学大学院社会学研究科へ提出した修士論文に修正を加えたものである。
- 2) 「スクールカースト」における「カースト」の用法は本来の用法とは異なるが、森口明は当事者の使っている言葉をそのまま使うことで、当事者と概念の共有をおこない、モデルの検証を容易にするため、及び従来論じられてきた学級内における生徒の地位分化理論との混同を避けるために「スクールカースト」という言葉を使用している(森口2007:43)。
- 3) 森川嘉一郎によると、中森明夫が最初に命名した「おたく」とは、学級社会の中でバカにされる立場であり、なおかつそのような人間は「コミケット」や「二次元コンプレックス」といった趣味を持っている、というイメージの人物像であった(森川2008)。さらに、齊藤環は「スクールカースト」のほびこる学校生活にあって「オタク」はかなり決定的な負の属性として認識されるとしたうえで、「友人が少なく空気が読めず、異性関係も不得手なおたくは、ほぼ確実にカースト下位に位置づけられるという。おたくであると認識されることは、そのままいじめの対象となるか、あるいは一般の生徒からは相手にされないという事態につながりやすい」(齊藤2010:53)と述べている。
- 4) 自己執行カテゴリーと他者執行カテゴリーについてはハーヴェイ・サックス(サックス1987)の議論を参照。
- 5) 0時から4時台の深夜放送帯(一部は23時台)に放送されるアニメ作品をさす。深夜放送帯に放送されるアニメ作品は1990年代後半から増加し、かつてテレビアニメの放送時間帯の中心であった18時台から22時台の放送本数が減少しているのに対して、深夜放送帯においては2004年に99本、2006年には156本の作品が放送されている(電通総研編2008:92,96)。

作品内容はSF、ファンタジーや学園ドラマなど多岐にわたるが、テレビ番組プランナーの安斎昌幸によれば、これらの作品群は「様々なお約束と引用に溢れ」たハイコンテクストなものであり、作品をより深く楽しむためには「今までのアニメ視聴の経験から知らず知らずに基礎知識とお約束的なパターンを吸収している」必要がある(安斎2015:8-9)。それゆえ、「深夜アニメ」はインタビュー対象者が自己を「オタク」として差異化するためのツールとして利用されやすいといえる。
- 6) 若者たちが、対面的相互作用の範囲を超えた交流よりも、すでに親密な関係にある仲間同士で時間と空間を超えてつながり続けるためにインターネットを利用する傾向にあり、それは実質的に、すでに存在する人間関係の濃度をさらに高める閉鎖的なシステムとなっているのと指摘が、土井隆義によってなされている(土井2004:2014)。しかし、I氏の場合は逆に、日常的な対面的相互作用の範囲内で充足できなかった「オタク文化」を介した交友関係を、インターネット上に確保していた。ここからは、特にその愛好者の人口が少なかったり、スティグマ化されているなどの理由で、学級内で同好の士を確保しづらいようなサブカルチャーの実践者にとって、インターネットは土井が危惧するような人間関係の閉鎖化よりも、新たな関係の開拓をもたらすメディアとしての側面が強いのではないかという仮説を立て得る。
- 7) インタビュー対象者の中では先に見たI氏のほかB氏とC氏の語りがそれにあたるが、本稿では割愛する。
- 8) 文献において「腐女子」は以下のように説明されている。

「元々は、男性同士の恋愛を主題とするフィクション(つまり『やおい』)などを好む特異な趣味を持った女性という意味合いで使われる用語だったが、近年では、単にオタク的傾向をもつ女性全般を指すことも多くなってきた」(オタク文化研究会2006:153)

「『腐女子』とは男性同士の恋愛やセックスを描く『やおい』や『ボーイズラブ(BL)』を嗜好する女性たちのことだ」(杉浦2006:5-6)

参考文献

- 明石要一 (1986) : 学級の社会学. 麻生誠・小林文人・松本良夫編著 : 学校の社会学——現代学校を総点検する. 学文社, 87-103
- 安斎昌幸 (2015) : 深夜アニメ・スタディーズ2015 Summer. ムゲンノホシゾラ.
- 電通総研編 (2008) : 情報メディア白書2008. ダイヤモンド社.
- 土井隆義 (2004) : 「個性」を煽られる子どもたち—親密圏の変容を考える. 岩波書店.
- 土井隆義 (2014) : つながり煽られる子どもたち—ネット依存といじめ問題を考える. 岩波書店.
- 濱野智史 (2012) : デジタルネイティブ世代の情報行動・コミュニケーション. 小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野智彦編 : 若者の現在——文化. 日本図書センター, 63-106
- 本田由紀 (2005) : 多元化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで. NTT出版.
- 熊代亨 (2014) : 融解するオタク・サブカル・ヤンキー—ファスト風土適応論. 花伝社.
- 間庭充幸 (1990) : 日本の集団の社会学——包摂と排除の構造. 河出書房新社.
- 文部科学省 (2016) : 文部科学統計要覧 平成28年版.
- 森口朗 (2007) : いじめの構造. 新潮社.
- 森川嘉一郎 (2003) : 趣都の誕生—萌える都市アキハバラ. 幻冬舎.
- 森川嘉一郎 (2008) : おたくと漫画. ユリイカ, 40(7),196-202
- 西澤晃彦・渋谷望 (2008) : 社会学をつかむ. 有斐閣.
- オタク文化研究会 (2006) : オタク用語の基礎知識. マガジンファイブ.
- サックス, ハーヴェイ. 山田富秋・好井裕明・山崎敬一編訳 (1987) : ホットロッダー—革命のカテゴリー. : エスノメソドロジー—社会学的思考の解体. せりか書房, 21-37
- [Sacks, H. (1979) : Hotrodder: A Revolutionary Category. Psathas, G. (ed.); *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*. Irvington Publisher, 23-53.]
- 斉藤環 (2010) : 博士の奇妙な成熟——サブカルチャーと社会精神病理. 日本評論社.
- 杉浦由美子 (2006) : 腐女子化する世界—東池袋のオタク女子たち. 中央公論新社.
- 鈴木翔 (2012) : 教室内カースト. 光文社.
- 上間陽子 (2002) : 現代女子高校生のアイデンティティ形成. 教育学研究, 69(3), 367-378
- ウィリス, ポール. 熊沢誠・山田潤訳 (1985) : ハマータウンの野郎ども——学校への反抗・労働への順応. 筑摩書房.
- [Willis, P. E. (1977): *Learning to Labour: How Working Class Kids get Working Class Jobs*. Aldershot: Gower.]

Otaku Culture as Counterculture in the Class

Hiroki Makino

In this study, I focus on *otaku* culture, investigating this subculture in a Japanese high school. *Otaku* are often located in a lower position in the hierarchy of the community of classmates. In the sociology of education in Japan, the hierarchy of students has been treated as a caste system in the school since the 2000s. School castes place each student into a position in the hierarchical order and construct an invisible hierarchy of taste and subcultures at the same time. However,

otaku students and their subculture have not yet been explored fully in the study of school castes.

This study is based on semi-structured interviews with those who have finished high school. The interviews were conducted in 2012. The following three points are determined. First, as *otaku* groups are formed against the pressure the dominant subculture, such as sports culture, in the classroom, *otaku* students tend to give up competition in the classroom and look for another way to create an alternative order where they can have advantages beyond the classroom. Secondly, some of the *otaku* groups act as cultural mediators who transmit *otaku* culture to other classmates of non-*otaku* groups in the classroom, and may try to change the hierarchy of school castes, combining it with the taste of the subculture. They may activate *otaku* culture as a counterculture in the classroom. Third, despite of the efforts of *otaku* as cultural mediators, *otaku* culture could not gain the top position in the hierarchy of the subculture in the school castes, because *otaku* lack the ability to communicate with whole groups and individuals in the classroom. Sociability is an indispensable element of the dominant culture in the classroom, and the nature of *otaku* culture puts impediments in the way of contributing to the sociability that the teacher requires in the classroom.

Key words : school castes, *otaku* culture, subculture, counterculture